

# 大東ふれふれ帳

(8)

## 雀、百まで 踊り忘れず

多忙と楽しさを表現することばに「盆と正月が一緒に来たような」という。

一年を二分して、春は

正月、そのあとが盆である。いずれも、もとは嚴肅な節会(せちえ)の行事であったにちがいない。

風土記の一つ「常陸国風土記」に筑波嶺(つくばね)の「がいに」というのがあ

る。春、秋の収穫どき、それを喜び歌舞を行った様子がしるされている。

どうやらこの行事と仏教伝来後の祖先供養の行事とが結びつき始まったのが盆踊りではなからうか。

お盆に、ご先祖様の霊を迎えて交歓するということで、ごちそうをつくり供

え、かつ食べる楽しい機会でありお迎えした精霊を慰めるために、音頭や歌謡に合せて踊る。

早い所では、七月の下旬から始まり八月にはピークとなる、夕やみのせまるころ、ゆかた姿の人々が、会場に三三五五と集まり始め、梅(やぐら)のスピー

カーから流れる音曲に合わせ踊りの輪がふくらんでいく。

普段着付けぬ、ゆかた姿の子供たち、男の子は堅くギクシヤクと、女の子は、さす手、ひく手もしなやかに、そこはかとした色

気なふりまく。盆踊りの歌曲はどの地域も大差なく、子供向けにはテレビ漫画のキャラクターもの、大人向

けには各地の音頭や、民謡が流される。

午後九時ごろ、主役の子供はお開きの時間、急激に人の波がひき、あとは踊り巧者の大人の輪が大きく広がる。

ここは河内。音頭の主流はやはり「河内音頭」。十四世紀末、室町時代に始まったとか、そのころ、南河内の常光寺(八尾市本町)の地藏堂建築のとき、遠方

より材木を運ぶのに歌われた「木引唄」が河内音頭の起りという。室町、安土桃山、江戸時代と歌い継がれてその時代の事件や、身の回りの出来事を織りこんださしめ民謡瓦版的な内容に飾りつけられたらしい。

正調河内音頭には、地藏

盆踊りで歌い継がれてきた八尾市の「流し音頭」。宝永年間には洪水被害の続いた長瀬川の改修工事で歌われた、柏原市の「平音頭」などである。

昭和三十年代より大衆娯楽の劇場などで歌い演じられ、全国に広まった「鉄砲節」は、半黒音頭と六郷音頭をミックスし浪曲の節回しをつけたようで、正調に比べせりふも少なく、伴奏

にギターなどを加えテンポも早く、ヤングのリズム感に合う「新河内音頭」である。まもなく盆踊りの季節、時代の流れと共に音頭の流れと踊りの振り付けに多少の変化があっても、最も大衆的な盆踊りが、ゆく夏を惜しみながら各地域の踊り好きと巧者が集まり盛大に催されることであろう。

文・今村安和



暑さを忘れて、広がる盆踊りの輪